

# 江馬氏館と江馬氏

室町期の国人領主と館

小島道裕

Muromachi Period Regional Lords and Their Manor Houses—The Case of Ema Family, Hida Province

はじめに

- ① 文献史料に見える室町期の江馬氏
- ② 江馬氏館の遺構と室町期国人館の事例
- ③ 江馬氏館とその変遷の意味

## 【論文要旨】

飛騨の国人領主江馬氏は、庭園を伴う館で知られている。まず文献史料で考察すると、南北朝初期から將軍に近侍し、遵行指令を受け、中央と密接な関係を持っていたが、一五世紀後半には自立した地位を持つことが知られ、一六世紀には莊園関係の史料には見えなくなる。一方遺構は、一四世紀末―一五世紀前半に、「花の御所」を模倣した館が営まれるが、一五世紀後半には山城などに機能が分散し、一六世紀には館としての機能が廃絶する。こうした現象は他の国人領主の館にも見られることが知られてきており、国人領主が全国的な体系の中で存在していた一五世紀前半から、領域的な領主として自立する一五世紀後半以降への変化と言える。この変化の中で衰退した国人も多く、逆に一四世紀中葉―一五世紀前半には中央と地方の国人の間の安定した関係があったと言え、これを「室町期莊園制」の一面と見なすことができる。

## はじめに

飛騨国、現岐阜県吉城郡神岡町の大字殿に位置する江馬氏館は、高原郷（現神岡町・上宝村付近）を治めた江馬氏の館跡として知られる。石組みの池がある庭園を持つことなどが注目されて、早く一九八〇年に、周辺の山城と共に国史跡にも指定されている。<sup>(1)</sup>近年史跡整備に向けての調査が進み、筆者もそれに関与する中で多くの知見を得ることができた。<sup>(2)</sup>本稿ではそれに基づいて、他の国人館の事例とも比較しつつ、室町期における国人領主の存在形態について多少の考察を試みることにしたい。

## ①文献史料に見える室町期の江馬氏

### 江馬氏の出自

江馬氏の出自については、信頼すべき文献史料を欠く。『江馬家後鑑録』などの後世の史書には、平経盛の子輝経が北条時政に養育され、後に飛騨に流されたのが江馬氏の祖である、といった記述があるが、それが信用しがたい事は既に指摘されている（葛谷一九七〇、神岡町教委一九七九など）。

しかし、「江馬」の地名はこの付近にはなく、やはりその出自は伊豆国の江馬庄に求めるのが自然であろう。江馬庄は北条氏の重要な所領であり、北条義時・泰時がそれぞれ江馬（江間）四郎・太郎を名乗り、また泰時の弟に始まる名越氏も江馬氏と称されるようになっていく。

また一方で鎌倉幕府の御家人名簿の性格を持つ「六条八幡宮造管注文」（建治元二一二七五年）には、伊豆国の項に「江間平内兵衛入道跡」が見えており、江馬庄現地にも江馬（江間）氏が御家人として存在していたと考えられる（福田・海老名一九九二参照）。

具体的な経緯については明らかでないものの、そのどちらかが所領を得て、鎌倉時代のある時期に一族が移り住んだと考えるのが妥当であろう。飛騨国北端の高原郷に隣接する越中の守護を、鎌倉期に名越氏がつとめており、そのこともあるいは関係があるかもしれない。

### 一四世紀中葉

飛騨の江馬氏が文献上ではっきり確認できるようになるのは、南北朝期以降である。<sup>(3)</sup>以下、これまでに判明した主な文献史料を編年で挙げて、考察してみたい。

現在の所、初見史料は次の天龍寺造営の儀礼に関する記録である。

史料1 天龍寺造営記

（前略）

（暦応五〃康永元年）  
十二月二日、天晴 上棟

（中略）

同五日、勅使并両將軍詣寺、（中略）

両殿御出供奉人

（中略）

小侍散状云、付年齢 有官任日次第同日齒次第  
次第不同云々、無官同前

松田備前次郎左衛門尉盛信<sup>四十</sup>

長井斎藤左衛門尉実持<sup>廿五</sup>

秋元彦六左衛門尉定保<sup>五十三</sup>

中沢弥六左衛門尉兼基<sup>四十二</sup>

吉河次郎左衛門尉経直<sup>廿九</sup>

片山彦三郎左衛門尉高親<sup>三十一</sup>

山口六郎左衛門尉衡可<sup>廿五</sup>

同彦七左衛門尉貞衡<sup>廿一</sup>

真下中務丞広仲<sup>四十</sup>

伊自良左近将監知清<sup>廿七</sup>

同左衛門次郎知国<sup>廿四</sup>

江馬左近将監忠繼<sup>世五</sup>

山内掃部允兼俊<sup>廿四</sup>

多賀谷平二光忠<sup>四十二</sup>

高山七郎久保<sup>廿二</sup>

俣野安八宗忠<sup>二十一</sup>

大草弥九郎公重<sup>廿</sup>

次両将着座御棧敷簾中之後、召出木工等、(中略)

次大工三拜、役人漸進出、

次引祿、

(中略)

馬二疋

一疋<sup>錫毛鞍</sup>、桃井下野守進、真下引之、

一疋<sup>同毛</sup>、佐々本佐渡判官入道進、江馬引之、

(中略)

被物一重 江馬役

(後略)

(『鹿王院文書の研究』第三七号)

鎌倉幕府滅亡後間もない南北朝初期の史料であり、しかも小侍所の武士として、京都において將軍の出席する儀礼に参加していることが注目される。おそらく鎌倉幕府御家人以来の系譜を引き、室町幕府においても將軍と近い関係にある国人であると考えることができよう。江馬氏関係史料としては従来知られていなかったものだが、飛騨江馬氏の初見史料であり、またその性格を考える上で、重要である。

江馬氏はいわゆる「奉公衆帳」にはその名が見えないが、それ以前の十四世紀において幕府御家人であったことは確実であり、この記録は、「奉公衆」以前の幕府家臣団組織についても重要な示唆を与える史料と言えよう。

なお、上棟の引祿の際に、江馬氏は「佐々本佐渡判官入道」の進めた馬を引いているが、この佐々木氏は京極高氏(導誉)のことである。後に導誉が飛騨守護となつてゐることとあるいは何らかの関係があるかもしれないが、他の「進」―「引之」の人物の対応が一般的にそのような関係であるとも言ひ難く、あまり強調する必要はないであろう。やはりここでは、幕府の直臣としての性格に注意しておきたい。

一四世紀後半

地元の飛騨における活動を示す史料としては、次の一四世紀後半の一連の文書が知られている。

史料2 足利將軍家御教書案

前左衛門督教言卿雜掌申、飛騨国江名子・松橋等領家職事、所被下

院宣、守護家人垣見左衛門藏人・同左近藏人等濫妨云々、早江馬

但馬四郎相共、沙汰付下地於雜掌、可執進請取之状、使節不可有緩

怠之状、依仰如執達件、

応安五年十二月十四日 武藏守御判

広瀬左近将監殿

史料3 足利將軍家御教書案

山科宰相雜掌申飛騨国江名子・松橋両郷領家職事、守護被官人垣見

左衛門藏人・同左近藏人等押領云々、早江馬但馬四郎相共、退彼妨、

沙汰付下地於雜掌、可被執進請取状、更不可有緩怠之状、依仰執達

如件、

永徳元年七月二日 左衛門佐在判

伊勢因幡入道殿

史料4 伊勢貞長施行状案

山科宰相家御領当国江名子・松橋両郷領家職事、任七月二日御教書之旨、江馬但馬四郎相共、沙汰付下地於彼雜掌、可取請取、若有子細者、載起請文詞、可有注進候也、謹言、

(三八八)  
永徳元

七月廿二日

(伊勢貞長)  
心定判

稲垣三郎殿

史料5 足利將軍家御教書案

山科前宰相雜掌申、飛驒国江名子・松橋両郷領家職事、被官人垣見新藏人相語江馬能登三郎等、及濫妨狼藉云々、太不可然、所詮不日退彼輩、可被渡付雜掌、若有緩怠有者、可有殊沙汰之状、依仰執達如件、

(三八三)  
永徳三年七月五日

(新波義将)  
左衛門佐在判

(京極高秀)  
佐々木大膳大夫殿

史料6 室町幕府奉行人(カ)連署奉書案

飛驒国江名子・松橋郷段錢之事、可被止御催促之由候也、恐々謹言、

(三八八)  
嘉慶二

五月十六日

備中守□□判

(松田)  
丹後守貞秀判

謹上 江馬民部少輔殿

(史料2-6『山科家古文書』)

山科家領の飛驒国江名子・松橋両郷について、室町幕府から出された指令である。江名子は現高山市内に地名が残り、松橋は不明だが、おそらくその近隣であろう。飛驒国内ではあるが、江馬氏の本拠高原郷ではない。

史料2で、江馬但馬四郎と共に下地還付の使節に任じられている広瀬氏は、江馬氏館のある神岡町に隣接する国府町に城館を持つ国人であり、

この両者が、鎌倉時代以来の制度である「両使」として執行を命じられたものである。

史料3・4も同様であり、守護被官人垣見氏の押領を江馬但馬四郎と共に排除すべきことが稲垣三郎に命じられており、稲垣氏はやはり近隣の国人と考えられる。

史料5では、これまでの江馬但馬四郎との関係は不明ながら、同じ江名子・松橋郷について、江馬能登三郎が押領の側として現れ、守護京極氏に排除指令が出されており、五年後の史料6では、両郷への段錢催促の停止が、江馬民部少輔に命じられている。

一四世紀後半の、江名子・松橋郷関係の一連の文書は以上だが、これらに見える江馬氏の性格をまとめれば、次のようになるか。すなわち、まず室町幕府から両使の一人に任命され、また直接の指令も受けることから、幕府御家人であると認められる。

そしてここからうかがえる現地での活動は、むしろ荘園領主に伝来した史料という性格によるが、すべて荘園制の維持に関わるものである。史料5の様に、明らかに荘園を押領する側にまわっており例もあり、荘園領主にとっては必ずしも「味方」ではない両義的存在であったことがうかがえるが、いずれにしても、その活動は荘園を単位とし、また幕府・荘園領主という中央との結びつきの中で存在が規定されており、荘園制の枠組みの中で存在する在地領主としての性格を見ることが出来る。

一五世紀後半

一三八八年以降、江馬氏に関する確かな文献史料は、一五世紀後半まで見受けられない。そして、この時期の史料に見られる江馬氏の性格は、一四世紀後半のそれとは変化が見られる。引き続き、主な史料を検討してみたい。

史料7 室町幕府奉行人連署奉書案

山科内蔵頭家雜掌申、飛驒国岡本上下保・石浦郷并江名子・松橋郷

等事、被返付訖、早莅彼所、致合力、可被沙汰居雜掌之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明三<sup>(四七二)</sup>

十月五日

飯尾 為信<sup>(飯尾)</sup>  
之種<sup>(飯尾)</sup>

姉小路中將家雜掌<sup>(基綱)</sup>

姉小路左衛門佐殿

江馬左馬助殿

史料8 伊勢貞宗書状案

山科殿御家領、就飛驒国所々事、被成奉書候、於国儀者、任御成敗旨、無如在、諸篇可被申付之由、被仰出候間、内々自私令申、心事期後信候、恐々謹言、

文明三<sup>(四七二)</sup>年

十月八日 貞宗判<sup>(伊勢)</sup>

江馬殿御宿所

史料9 細川勝元書状案

就国之儀、江馬左馬助不可有疎略之由、注進到来□□□、向後致忠節之趣、被仰談候者、可然候、恐々謹言、

文明四<sup>(四七三)</sup>年

七月廿九日 勝元判<sup>(細川)</sup>

姉小路左衛門佐殿

史料10 細川勝元書状案

就国之儀、巨細承候旨、不可有等閑候、向後別而被抽忠節候者可然候、委細猶秋庭備中入道可申候、恐々謹言、

文明四<sup>(四七三)</sup>年

七月廿九日 勝元判<sup>(細川)</sup>

江馬左馬助殿

史料11 秋庭備中入道書状案

就国之儀、自屋形以状被申、此間者、於京都時□□子細にて、御返事遅々候、今度山科殿様御申候間、委細被申御礼、以後弥御忠節可然存□□、期後信時候、恐々謹言、

文明四<sup>(四七三)</sup>年

七月廿九日

沙弥

謹上 江馬左馬助殿

(以上、7-11『山科家礼記』)

先に見た山科家の飛驒の所領についてのその後の史料であり、幕府の本所領回復政策に基づいて、不知行化していた所領の回復を図った際の一連の文書である。ここにおいても、江馬氏が現地における執行者として現れるが、その立場は一四世紀後半とは異なり、「両使」の一人ではなく、国司姉小路氏とならび、あるいは単独で遵行を命じられ、また管領細川勝元の発給文書からは、「国之儀」について広汎な権限を与えられていることがうかがえる。史料8では、幕府政所執事伊勢貞宗からも「内々自私令申」として書状が出されているが、一六世紀半ばの江馬氏は伊勢氏の庶子であることが知られ、『天文日記』天文十一年(一五四二)一〇月三日条、一五世紀後半には既に伊勢氏と何らかの関係が出来ていたことがうかがえる。

史料12 万里集九『梅花無尽蔵』 長享三年(一四八九)五月条(各日の漢詩の部分は略)

五日。出吉野。透過冢谷之関門。始嘗飛驒州山川之嶮。預想帰岐陽之旧廬翫節物、今已齟齬。

六日。入高原。脱鞋於旅戸。江馬閣下贈以芳樽角黍。晚間營華膳。招余展待。

七日。扣飛州、太平山安国精舎、集雲軒主盟、公藏局之室。遂宿焉。境有百花潭万里橋。

八日。公老人挽留、設浴室。又為留一宿。

九日。江馬閣下出十余夫三馬送余。十余夫之懶。馬上呵之。

十日。漸過飛州入濃。(後略)

史料13

(前略) 又御仏事錢堅被仰付于兩奉行、時松田對馬守、飯尾彦右衛門尉在殿中云、已前五万疋許、御仏事可然乎之由愚白之、只今其半分足付有之、自公方五千疋、武衛三千疋、赤松千匹、武田二千疋、江馬千疋、大内国役殘三千疋、同香錢万匹、以上二百五十貫文有之、相殘分尚々可督諸家云々、

〔蔭涼軒日録〕延徳二年(一四九〇)四月一五日条

史料14 室町幕府奉行人連署奉書

一、北野宮寺領飛驒国荒木郷内上分事、近年押領之間、神事退転、太不可然、所詮不日沙汰付社家雜掌、被全所務、可被遂神事、更不可有難決之由被仰出也、仍執達如件、

(四九二)  
延徳三

五月六日

(松田)  
長秀判  
(飯尾)  
為則同

守護(京極政経)

史料15 室町幕府奉行人連署奉書

一、北野宮寺領飛驒国荒木郷事、近年守護押領之間、嚴重神事及退転之条、難測神慮者歟、所詮不日可沙汰社家雜掌之旨、被成奉書訖、宜存知之由被仰出也、仍執達如件、

(四九二)  
延徳三

五月六日

(松田)  
長秀判  
(飯尾)  
為則同

江間殿

(以上、『北野社家日記』延徳三年(一四九二)七月五日条)

史料16

一、自姉小路御使在而、飛州荒木郷事、江馬方へ可被仰由也、

〔北野社家日記〕延徳四年(一四九二)四月一八日条

史料17

一、飛驒荒木郷内神用事、今日も江馬方へ申遣処、南円院へ納米由返答在之、奏者者和平太と云者也、此方使国分也、

〔北野社家日記〕延徳四年(一四九二)六月二一日条

史料14・17は、北野社の飛驒荒木郷(現吉城郡国府町内か)の知行回復に係わる一連の史料である。おそらくこれも幕府の本所領回復政策によつたもので、他の所領についても一斉に同様の文書が発給されている。試みにこの時の宛所と所領を一覧化すれば、表1のようになる。

宛所となっているのは、基本的に守護・守護代である。加賀が直接「名主沙汰人百姓中」になっているのは長享元年(一四八七)からの一向一揆のために守護系統での遵行が不可能であつたためであろう。江馬氏は現地での代官であつたと思われ、表中4-1、4-2の、美作国吉野保での赤松・櫛橋殿の關係と同様である。「荒城郷」は、高原郷の西の古川盆地、現国府町付近に比定されることから、江馬氏の支配領域の拡張もうかがえる。史料16・17によれば、北野社はその後年貢納入の催促を続けているが、実効のほどは定かでない。17には奏者として和尔氏が見え、家臣団の一端がうかがえる。和尔氏は現在も現地に多く、在地の土豪であろうと思われる。

同じころの、史料13相国寺の仏事錢納入では、江馬は赤松・武田・大内などの守護と並ぶ位置づけがされている。単なる一国人、守護被官ではなく、史料7・11でも見たように、応仁・文明の乱を通じて、現地において守護に代わる存在に成長していることがうかがえる。

史料12の『梅花無尽蔵』長享三年(一七八九)五月五日・九日条は、よく知られた史料である。高原郷を訪れた万里集九を招き、馬と人夫を

表1 延徳3年(1491)5月6日付けの  
北野社領関係幕府奉行人連署奉書

宛所		所領
1—1	松梅院	加賀国福田庄
1—2	敷地彦右衛門尉殿 (社家代官)	〃
1—3	当所名主沙汰人中	〃
2	上杉相模入道殿(定房)	越後国大積郷
3	上杉相模入道殿(定房)	越後国上田関郷
4—1	赤松兵部小輔殿(政則)	美作国吉野保
4—2	櫛橋殿(則高) (代官、赤松被官人)	〃
5	赤松兵部少輔(政則)	播磨国小松原庄
6	守護代	備後国吉津保上分
7	守護代(山名政豊カ)	但馬国気比永上庄領家職
8—1	守護(京極政経)	飛騨国荒木郷上分
8—2	江間殿	飛騨国荒木郷
9	今川龍王殿(氏親)	駿河国河原一色
10—1	赤松兵部少輔殿(政則)	美作国長岡藤原五名
10—2	当所名主沙汰人中	〃
11	当所名主沙汰人等中	加賀国小泉保
12	守護代	能登国菅原庄
13	山名治部少輔(豊時)	因幡国岩井庄吉田保内2村

(注)

- ・『北野社家日記』延徳3年6月17日、7月2日・5日、8月10日、11月18日条に所載。
- ・奉行人は、13は松田長秀・松田頼亮、他はすべて松田長秀・飯尾為則。
- ・2・3は縦紙。
- ・『北野社家日記 第三』(『史料纂集』)による。

付けて次の目的地へ送り届ける様が描かれており、支配領域を訪れた文化人をもてなす、地域領主としての性格が髣髴とされる。また、この間に万里集九が訪ねている安国寺が荒城郷と考えられる現国府町に所在することから、そこが江馬氏の支配領域の内であったことが推測されている。

## 一六世紀

これ以降江馬氏は、『本願寺日記』に先のような若干の記述がある以外、中央の史料にはほとんど現れず、特に荘園関係の史料はほぼ皆無となる。

江馬氏のその後について略述すれば、一六世紀には姉小路氏を滅ぼし、高山市域を本拠とする南飛騨の三木氏と勢力を争い、また土豪・商人頭などと思われる家臣への発給文書も残るが、一方で上杉氏・武田氏の勢

力争いに巻き込まれ、最終的には、外部勢力である上杉氏が後退、武田氏が滅亡し、織田氏信長が倒れた本能寺の変後に、三木氏と直接対立して敗れ、没落するに至る(岐阜県一九六九a、神岡町一九七二など)。荘園制についての検討を課題とする本稿においては、この時期においては、荘園制が名実共に意味を失っていることを確認するにとどめたい。

## ② 江馬氏館の遺構と室町期国人館の事例

## 江馬氏館

江馬氏館の遺構は、先述のように岐阜県の山間部、神岡町大字殿の山を背後に控えた台地上に存在する(図1)。館の本体は、山側がふくらんでいるが、基本的には約一町四方で、北・西・南の三方を空堀で囲ま

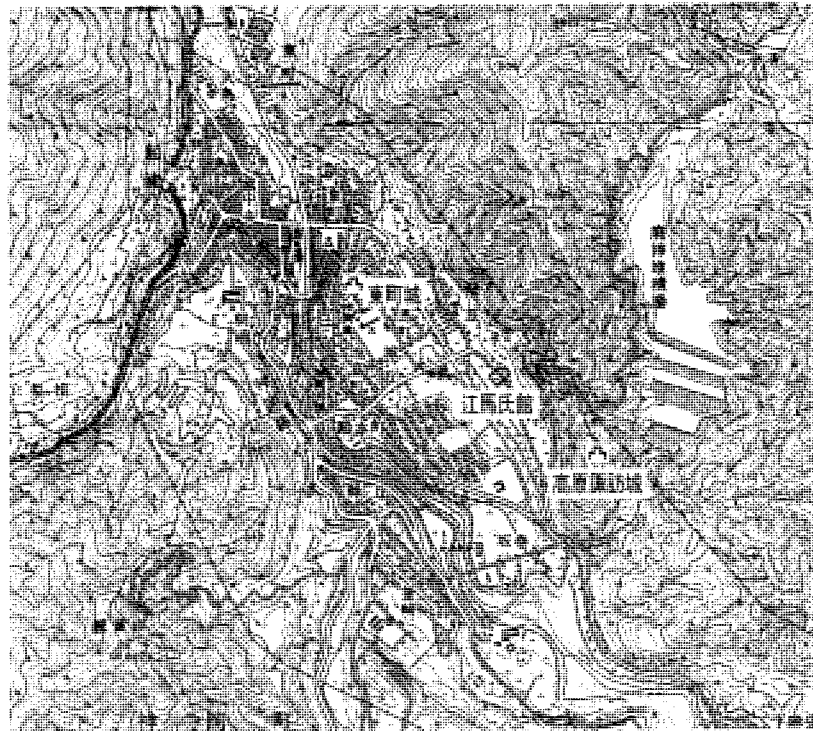


図1 江馬氏館の位置  
(2万5000分1地形図「船津」(1974年)、「鹿間」(1973年))

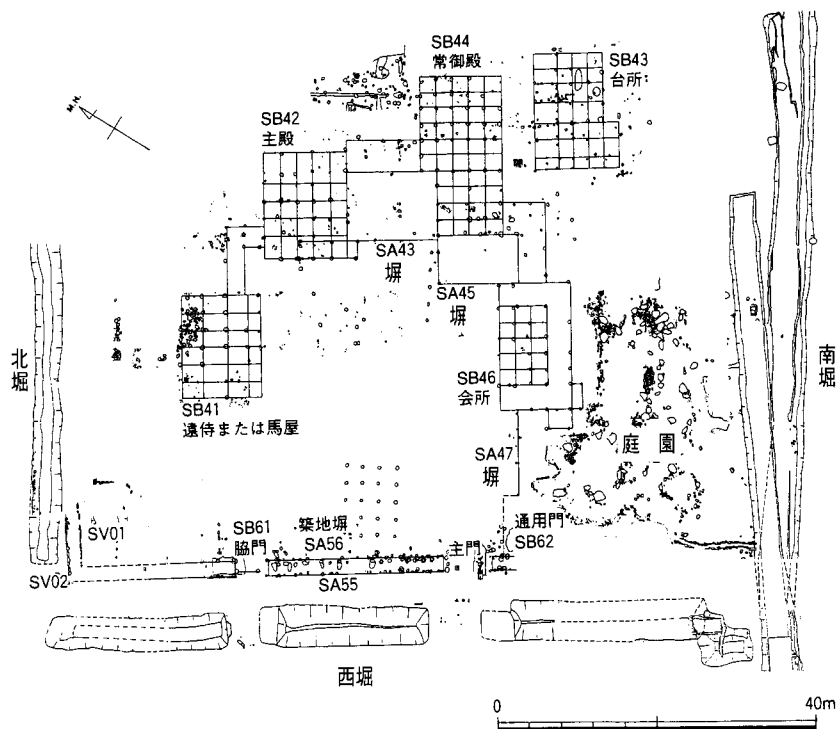


図2 江馬氏館ⅡA期の主な遺構(補註参照)  
(神岡町教委2001に加筆)

れている。

遺構の時期については、最新の調査報告書(神岡町二〇〇二)によれば、およそ次のようである。(補註参照)

Ⅰ期(一三世紀後半～一四世紀)

この地の利用が始まる。総柱建物が散在。堀はまだない。

ⅡA期(一四世紀末～一五世紀前半)

方一町の館が整備され、A期建物、堀、庭園が造成される。館外に

も手工業生産の場などが整備される。遺物の出土量は最も多く、館の最盛期である。

ⅡB期(一五世紀後半～一六世紀初め)

方位を変えて建物が建て替えられる。

Ⅲ期(一六世紀中頃～一六世紀末)

館の機能が他の場所に移される。(遺物は、量は少ないが一六世紀中葉まで見られる。)



遺構の特徴としては、ⅡA期、すなわち方一町の館が整備された時期であり、かつ館の最盛期でもある時期について言えば、館の内部には、二つの門を持つ築地塀がめぐり、池を伴う庭園が造られ、それぞれ遠侍または厩、主殿、常御殿、台所、会所と思われる五棟からなる建物群が配置されている(図2)。また、館の外部にも、宿直屋、厩、工房などが計画的に配置されている。

この館の構造については、当初から武家館の様式として、江戸時代の大棟梁平内家の伝書『匠明』所収の「東山殿屋敷図」や、一乗谷朝倉氏館との類似が指摘されているが(神岡町教委一九七九、小野一九九七)、一四世紀末という成立の時期や、先に見た幕府御家人としての性格から考えれば、むしろ、それらの室町期の武家屋敷の規範となったと思われる足利義満の「花の御所」の完成後、その影響を直接受けて成立した館と考えるのが妥当であろう。義満が「花の御所」へ移ったのは永和四年(一三七八)であり、おそらくその様を目の当たりにし、そこでの儀礼にも参加した御家人たちが、自らの館にその様式を取り入れたであろうことは十分想像できるのである。

義満の「花の御所」の詳細は、ごく一部の発掘調査を除いてまだ明らかになっていないが、その様式を受け継ぐと見られる洛中洛外図に描かれた將軍邸(図3)は、江馬氏館とほぼ共通の構成であり、このことから逆に江馬氏館が將軍邸の模倣であることを推定できる。洛中洛外図には、歴博甲本には「柳の御所」が、上杉本、歴博乙本、東博模本には復興後の「花の御所」が描かれているが、構成に大きな違いはない。また、歴博甲本の絵と江馬氏館は左右が逆になっているが、これは歴博甲本に描かれているのが「柳の御所」であり、「花の御所」とは逆に東面していることによる。江馬氏館の向きの方が、本来の「花の御所」と一致しているのである。

この他、正面の西堀が薬研状であることは「花の御所」跡で検出され

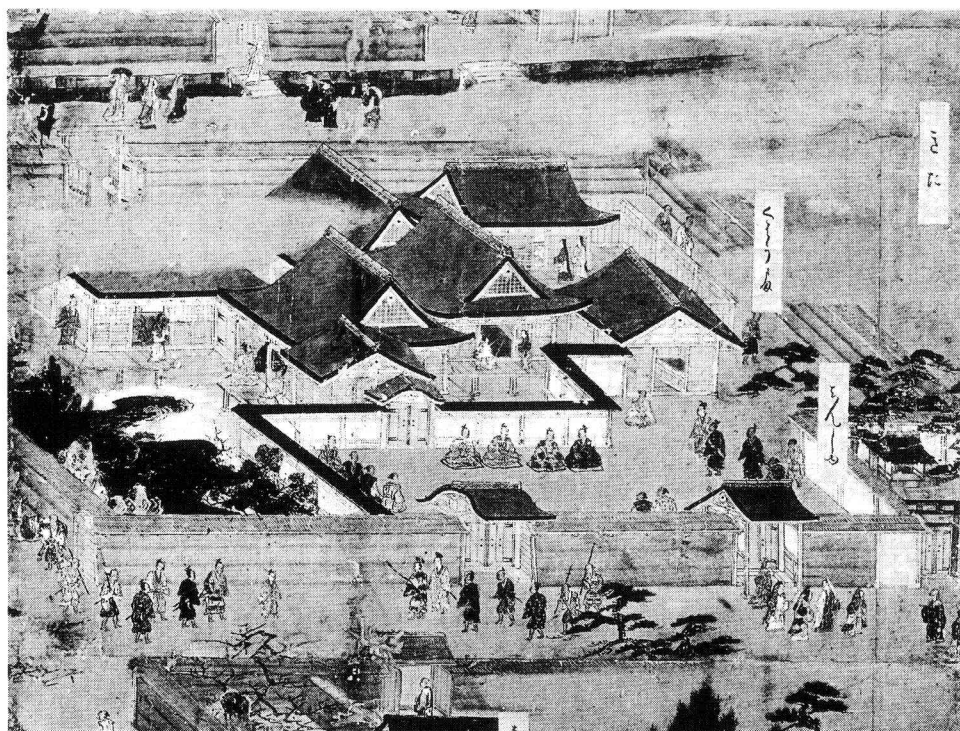


図3 將軍邸の建物配置  
(「洛中洛外図屏風」歴博甲本)

た堀の形状と一致し、また堀の内側に築地塀があること、広場と建物や庭園を区切る塀があることなど、この他にも両者の類似点が多い。

また、地名から、館の北側に「馬場」があったと推定されることも、あるいは室町幕府の野外儀礼として重視され、戦国大名城下などでも多く見られる犬追物の馬場との関係が考えられる。さらに、館跡の存在す

る「殿」の集落域のほぼ四隅には、諏訪社、天神社、加茂社、白山社という神社がそれぞれ配置されていたことは、館の造成と共に、館周辺の領域をも結界で区別し、京都の「四角四境祭」的なものを意識していたとも考えられる（大平一九九七）。

このような、義満の「花の御所」の影響を強く受けたと考えられる一五世紀前半までのⅡA期の後、一五世紀後半～一六世紀初めのⅡB期では、遺物が減ると共に、会所を除く建物の方位が変わり、広場にも建物が建つなど当初のプランがやや崩れはじめ、さらにそれ以降は館の機能を他の場所に移している。移動先として考えられるのは、背後にある山城高原諏訪城と、神岡の中心集落でもある船津を臨む神通川段丘上の東町城（現在「神岡城」として模擬天守が立つ）であるが、高原諏訪城は居館としての使用を想定するにはやや狭すぎるため、おそらく軍事的機能の高原諏訪城と居館機能（および経済的中心地統御の機能）の東町城に分化したと考えることができそうである。そして、最終的には、天正一〇年（一五八二）の江馬氏の没落によってこれらの城館も機能を失い、近世的な城館や城下町はこの地では建設されることはなかった。

#### その他の国人領主の館

以上、「花の御所」に類似した江馬氏館とその変遷を見てきたが、これと同様の国人館の事例は、近年調査事例が増加し、他にもいくつかが認められている。江馬氏館の意味を考察する前に、以下、それらについて略述しておきたい（詳細は引用参考文献欄の各報告書を参照されたい）。

#### 高梨氏（中野氏）館

長野県中野市所在。山城鴨ヶ嶽城を背後に持つ扇状地上に立地し、約一三〇×一〇〇mの単郭の館。報告書では明示されていないが、前川要氏によれば、一四世紀末から一五世紀前半の遺物が圧倒的に多く、一六世紀初期に入部したとされる高梨氏よりも、むしろそれ以前の国人領主

であり鎌倉幕府御家人でもあった中野氏の館と考えられる。池のある庭園とそれに面した会所を持つこと、当初は周囲が築地だったこと、堀が薬研堀であることなど、やはり「花の御所」との類似点が多く見られる。一五世紀後半以降は、鴨ヶ嶽城への移動が考えられる。

#### 東氏館

岐阜県大和町所在。長良川上流支谷の河岸段丘上に立地し、背後に山城篠脇城がある。約一町四方規模で、発掘調査によって庭園の池が検出され整備されている。遺物は一四世紀から一五世紀のものが中心とされる。また、絵図によって、馬場が隣接して存在していた事も知られる。なお、東氏は千葉氏一族の西遷御家人であり、室町幕府奉公衆である。

#### 江上館

新潟県中条町所在。三浦和田一族の中条氏の館。一町四方規模の主郭などからなり、一五世紀中葉から後半が盛期で、二時期の建物があり、当初は前面に広場があり池状の水溜を伴うなど、「花の御所」の構成との類似も認められる。山城鳥坂城と合わせて「本拠」として機能していた（齋藤一九九一）。

#### 三宅御土居（益田氏館）

鳥根県益田市所在。山城七尾城を背後に持つ、約一〇〇×二〇〇mほどの平地城館。遺物の年代は、一四世紀～一五世紀が中心であり、一六世紀第二四半期頃からは生活の基盤が七尾城に移っていることが確認される（前川一九九五）。中心部は調査が及んでいないが、再び館として使用された一六世紀末時点での構造は「花の御所」に近いものがあり、また周辺の寺院等には花の御所の影響を受けたと思われる室町期の庭園も存在する（小島二〇〇〇）。益田氏は奉公衆帳には見えないが、一五世紀代にはしばしば上洛して幕府での正月参賀にも参加している。

#### 屋代氏館

長野県更埴市所在。鎌倉幕府御家人でもあった屋代氏の館に比定され

る「城内」は一町四方規模の平地城館であり、堀跡の発掘調査では、一五世紀半ばを中心とする青磁などの遺物が検出されている。一五世紀後半から一六世紀にかけて、屋代城、荒砥城などの付近の山城へ移転したことが考えられる。

### ③ 江馬氏館とその変遷の意味

#### 江馬氏館の変遷

以上、江馬氏館とそれに類似したいくつかの国人館を概観してきたが、先に見た江馬氏についての文献史料と合わせて、若干の考察を行いまとめたい。

まず、遺構には明らかに共通した点を認めることができる。

一つは、館の最盛期が一五世紀前半ころにあることで、一五世紀後半からは館としての機能が低下し、一六世紀にはいるとほとんど機能を停止して、多くは居館としての機能を山城へ移転したと思われる。この、一五世紀後半以降の「要害」との併存と移転の問題は齋藤慎一が真壁など他の事例も挙げて既に注目しているが（齋藤一九九一、一九九七）、相当程度一般化できる現象と考えられる。

もう一つは、一五世紀前半の最盛期の館は、足利義満の「花の御所」の影響を強く受け、その規範の下に営まれたのではないか、ということである。この点はまだ必ずしもすべての事例で確認されてはいないが、それぞれの出自などから見ても、室町初期においては、幕府の御家人であった可能性が強く、館の構造についても「花の御所」が共通の規範となっていた可能性は高い。<sup>(8)</sup>

#### 文献史料との関係

さて、では以上見てきたような館の変遷と構造の問題を、文献史料、なかんずく荘園制との関係から見ると、どのように整理できるだろうか。

まず、文献史料では、一四世紀中葉から後半、具体的な史料の年代で言えば一三四二年から一三八八年の時期があり、これは、遺構で言えば、一三世紀後半～一四世紀のⅠ期から、一四世紀末～一五世紀前半のⅡA期にかかるのである。京都で將軍に近侍しつつ、荘園についての遵行指令を幕府から受けており、中央とリンクし、幕府の体制下で鎌倉時代以来と思われる現地での地歩を固めていた時期と言え、足利義満の「花の御所」の完成と共に、自らの館を幕府Ⅱ將軍邸と同じ様式で新設したのは、このような関係のためと考えられる。このような館を持ち、そこで中央と同様の儀礼を行うことは、自らが幕府と直結していることを在地の社会に誇示する上できわめて有効な装置として働いたであろうことは想像に難くない。江馬氏に限らず、幕府と直接の関係を持つ国人が、一四世紀末から一五世紀前半にかけて、「花の御所」を模倣した館を作っていることには、このような意味があると考えられる。そしてそこそが、中央と地方の関係からなるシステムとしての「室町期荘園制」の、一つの具体的な表象であると言えるかもしれない。

次に文献史料がまとまって現れる一五世紀後半（具体的には一四七一年～一四九二年）は、江馬氏館の遺構の区分では、ちょうどⅡB期（一五世紀後半～一六世紀初）に相当する。建物が建て替えられて方位も代わり、当初の「花の御所」を忠実に模倣したと思われる構成がやや崩れており、また遺物の量も減少することから、山城など他の拠点に機能が分散したと考えられる。平地居館と山城のセットから成る、齋藤慎一の言う「本拠」の成立した時期と言えよう。文献史料においても、幕府からは主従関係に基づく職権的な遵行命令というよりも、江馬氏が在地を掌握していることを前提にした文書が発給されている。中央との関係の中で在地での権力を維持していたと考えられる一五世紀前半までのあり方から飛躍して、独自の領域的な領主に成長していると見ることができ

この時期に山城への機能の分散、そして「花の御所」的な平地館の廃絶、という経緯をたどっていることは、江馬氏関係史料において、これ以後荘園関係の文献史料が途絶え、また中央の史料にほとんど見えなくなることに軌を一にしているのであり、以上のような中央との関係の変化として考えることで説明することができよう。他の国人館についても同様の変化をたどっていることから、この現象は、在地における「室町期荘園制」の解体を象徴していると言うこともできよう。

#### 江馬氏館の普遍性

もともと、江馬氏のような、またここで挙げた山城とのセット関係を持ち独自の領域支配を確保するに至った他の国人のような例は、必ずしも一般的であるとは言えない。

例えば、近江湖北での奉公衆についての太田浩司氏の研究によれば、大原氏・熊谷氏・土肥氏などの在地での動向を見ると、「一六世紀Ⅱ戦国期」になると、地域での領主としての力を失うことが共通しており、その理由として、①応仁・文明の乱以降の守護京極氏の在地性の深化、②奉公衆組織の崩壊、③経済的基盤の相違（段銭などによる領主としての収納の限界）、が挙げられている（太田一九九一）。

さらに付け加えれば、近年考古学的に明らかになってきた、一五世紀ころに顕著になる、集落の固定化および土豪と一体化した集落の成立という現象と、それに基づく新たな地域の形成という、在地社会の根本的な変化を考慮する必要がある<sup>(9)</sup>。

室町幕府ないし中央―地方のシステムと結びつくことで在地における権力を維持してきた国人領主は、このような在地社会の変動と、応仁・文明の乱以後の守護による領国化の強化の中で、没落を余儀なくされたと言えることができる。

逆に言えば、それ以前、一五世紀前半までは、在地社会において、中央との関係に基づいて、国人たちを中心とする秩序が形成されていたと

考えることができ、戦国期以降の変化からは、それ以前におけるこのような体制の存在が逆照射されてくるとも言える。これを「室町期荘園制」の一面としてとらえることもできよう。

江馬氏の場合、守護京極氏は最後まで在国しなかったため、当然その領国も成立しなかったという事情もあるが、少なくとも一五世紀前半における状況は他の地域と同じであり、国人領主の変遷をたどる上では例外ではなく、むしろ一つの標準的な事例として見る事が可能であろう。「飛驒の花の御所」とも言いうる江馬氏館の意味を、このように考えたと思う。

#### 註

(1) 国史跡指定名称は「江馬氏城館跡下館跡」。本稿では単に「江馬氏館」とする。  
(2) これまでに、神岡町教育委員会他一九九五、一九九六、一九九七、一九九八に、いくつかの点について所見を掲載した。

(3) 『岐阜県史』史料編古代・中世Ⅰには、正嘉元年（一二五七）五月の「遠江紙平朝臣在判」の禁制札案が掲載されているが、同書が「ナホ研究ノ余地アリ」とするように、疑問の余地がある。  
また、康永三年（一三四四）十一月一六日足利尊氏所領寄進状（園城寺文書。

『岐阜県史』史料編古代・中世四所収）によれば、園城寺が「飛驒国高原・小八賀南方」の替え地として佐渡国青木など六保に地頭職を与えられていることが、従来江馬氏の動向とも関係する史料として知られていたが、史料Ⅰからも、江馬氏の入部はそれ以前にさかのぼると見るべきだろう。

なお、園城寺文書中の文和二年（一三五三）足利將軍家御教書によれば、飛驒国には造園城寺料があったことが知られ、高原郷もそうした役割を持っていたことと思われる。

(4) 神岡町教委一九七九などでは「山科家の被官」とされていたが、当然誤りである。

(5) なお、「山科家礼記」などの記録には、年貢収納の徴証はない（菅原一九八五）。江馬氏が関銭を徴収し山科家へ京上したとする見解があるが（神岡町一九七二、服部一九九五）これも誤認である（小島「江馬氏館と古道」神岡町他一九九七）。

(6) 南限と考えられる薬研堀りの堀跡と庭園の一部が検出されている（浪貝・堀

内一九九二。また、二〇〇二年夏には、跡地の一部である同志社大学学生会館跡での発掘が行われている。

(7) 益田市教委一九九八所収「益田氏御殿略図写」。

(8) もともと、江馬氏館では、庭園は長大な岩を立て並べた類例のない「岩庭」的な物で、池と花木を重視する「花の御所」的な庭園との違いも指摘されている。基本的な構成などは類似しながら、それぞれの館に「個性」がある点も、今後注意すべき論点となろう。

(9) これについては筆者も何度か触れているが（小島二〇〇三など）、本共同研究の席上での報告でも、安田次郎氏の報告された、一四世紀末～一五世紀前半の永久寺の出挙の範囲が布留郷とおよそ一致することなどもこれに関わる問題である。

(10) 守護による領国制と言えるほどの国人層の一元的な結集は、一五世紀後半であることが指摘されている。川岡他一九八五など。

## 引用・参考文献

- 今谷明・高橋康夫編 一九八六『室町幕府文書集成奉行奉書篇』 思文閣  
岡村守彦 一九七九『飛騨史考（中世編）』 私家版、一九八八 桂書房  
太田浩司 一九九一「湖北における奉公衆の動向―佐々木大原氏を中心として―」『駿台史学』第八三号  
大平愛子 一九九七「江馬氏下館跡周辺の近世村落の復元」『江馬氏城館Ⅲ』金子拓男・前川要編 一九九四「一九九三年度日本考古学協会シンポジウム報告 守護所から戦国城下へ―地方政治都市論の試み―」 名著出版  
神岡町 一九七二『神岡町史』史料編 上巻（中世・近世・近代）  
神岡町教育委員会 一九七九「江馬氏城館跡発掘調査概報」  
神岡町 一九八二『神岡町史』特集編（飛騨国野史・国説集成）  
神岡町教育委員会・富山大学文学部考古学研究室 一九九五「江馬氏城館跡―下館跡発掘調査報告書Ⅰ―」  
神岡町教育委員会・富山大学文学部考古学研究室 一九九六「江馬氏城館跡Ⅱ―下館跡門前地区と庭園の調査―」  
神岡町教育委員会・富山大学文学部考古学研究室 一九九七「江馬氏城館跡Ⅲ―下館跡南辺の調査―」  
神岡町教育委員会 一九九八「江馬氏城館跡Ⅳ―下館跡南堀延長部周辺の調査―」  
神岡町教育委員会 二〇〇一「江馬氏城館跡Ⅴ―下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査―」

川岡勉・今岡典和・矢田俊文 一九八五「戦国期研究の課題と展望」『日本史研究』二七八号

岐阜県 一九六九 a 「岐阜県史」通史編 中世

岐阜県 一九六九 b 「岐阜県史」史料編 古代・中世一

岐阜県 一九七三「岐阜県史」史料編 古代・中世四

葛谷鮎彦 一九七〇「中世江馬氏の研究」 神岡町

小島道裕 二〇〇〇「花の御所の系図―国立歴史民俗博物館企画展示図録『天下統一と城』、千田嘉博・小島編『歴博フォーラム 天下統一と城』塙書房、二〇〇二年

小島道裕 二〇〇三「地域的祭祀の起源と機能―守山市小津神社祭祀圏を事例に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第九八集

齋藤慎一 一九九一「本拠の展開―一四・一五世紀の居館と『城郭』・『要害』と城館」吉川弘文館、二〇〇二

菅原正子 一九八五「室町時代における公家の所領経営と機構」『日本歴史』第四四三号

外岡慎一郎 一九八四「六波羅探題と西国守護―〈両使〉をめぐる―」『日本史研究』二六八号

外岡慎一郎 一九九一「鎌倉末―南北朝の守護と国人―『六波羅―両使制』再論―」『ヒストリア』一三三三号

中野市教育委員会 一九九三「高梨氏館跡―発掘調査報告書」

中野市教育委員会 一九九五「高梨氏館跡―発掘調査報告書 東小口調査」

中条町教育委員会 一九九三・九七「江上館跡―史跡奥山荘城館遺跡「江上館跡」の環境整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ―Ⅴ」

浪良毅・堀内明博 一九九二「中世都市遺跡の調査Ⅱ京都」『季刊考古学』第三九号 雄山閣出版

福田豊彦・海老名尚 一九九二「六条八幡宮造営注文」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第四五集 国立歴史民俗博物館

前川要 一九九五「出土土器・陶磁器から三宅御土居を考える」『月刊歴史手帖』第二三巻五号

益田市教育委員会 一九九八「七尾城跡・三宅御土居跡―益田市関連遺跡群発掘調査報告書―」

水澤幸一 二〇〇〇「越後国奥山荘政所条の都市形成」中世都市研究会編『中世都

市研究7都市の求心力」新人物往来社

矢田俊文 一九九四「戦国期越後における守護・守護代と都市」金子・前川編前掲

書

大和村教育委員会『東氏館跡発掘調査報告書』一九八四年

鹿王院文書研究会（代表・原田正俊）二〇〇〇『鹿王院文書の研究』、思文閣出

版

【付記】

本稿作成にあたり、江馬氏関係史料の所在等について、羽田聡氏より御教示を得た。期して謝意を表します。

（国立歴史民俗博物館歴史研究部）

（二〇〇二年六月七日受理、二〇〇二年一〇月四日審査終了）

補註

再校の段階で、過去の調査において誤認があり、ⅡA期としていた遺構（A群）とⅡB期としていた遺構（B群）の前後関係が逆転することが判明した、との報に接した。従って、ⅡA期の遺構として掲載した図2は、実はⅡB期の遺構、ということになる。（現時点で公表されたものとしては、大平愛子「江馬氏下館跡」『考古学ジャーナル』四九三、二〇〇二年があるが、詳しくは「江馬氏城館跡Ⅴ」より後に刊行される報告書を参照されたい。）

これに関する部分については当然本文も書き直しが必要であるが、既に修正が困難であるため、ここにその必要性を注記するに止めたことを御了解いただきたい。

ただし、ⅡA期の建物群とⅡB期の建物群は基本的には同じ構成であり、主要な論旨については変える必要はないと考えている。

---

## Muromachi Period Regional Lords and Their Manor Houses—The Case of Ema Family, Hida Province

KOJIMA Michihiro

Ema, one of regional lords (*kokujin*) in Hida, is known for its manor house with its garden. It can be seen from historical documents that Ema was brought close to the shogun from the mid-14th Century, receiving judgements of shogunate and maintaining a very close relationship with the government, but in the second half of the 15th Century, the family became known as having an independent status, and then in the 16th Century, could no longer be seen in manor-related documents. Looking at the architectural remains shows that from the end of the 14th Century to the middle of the 15th Century there was a manor house modeled on the *Hana no Gosho* (Flower Palace) of shogun in Kyoto, but by the second half of the 15th Century, the functions of manor house were split off to castles and other facilities, and in the 16th Century, it lost its function as a manor house. It is now known that similar phenomena can be observed with the houses of other regional lords, and can be said to represent the change from the first half of the 15th Century when regional lords were part of a nationwide system, to the second half of the 15th Century onwards, when they became independent as territorial lords. Many regional lords declined as part of this change, and in contrast, it can be said that there had been a stable relationship between the government in Kyoto and the regional lords in the provinces from the mid-14th Century through the first half of the 15th Century. This can thus be regarded as one aspect of the Muromachi period manor-system.